



《北京便り》 「光盤行動」をご存知ですか

最近、中国のサイトで頻繁に目にするようになった「光盤行動 (guang pan xing dong)」という言葉、皆さんはお聞きになったことありますか。中国語が分かる方は、「光盤」が「ディスク」を指す単語であるとお分かりになると思います。特許明細書など知財関係でこの言葉が出てくる場合は「ディスク」という理解でほぼ間違いありません。しかし、後ろに「行動」という言葉が付くと意味はまったく別のものになります。

日本語では、“目に明るさを感じさせる”意味で「光」という漢字が使われることが殆どだと思いますが、この「光」という漢字、中国語ではこれ以外にも“空にする”という

意味があります。「盤」は、お皿やお盆を指すので、最近出回るようになった「光盤行動」という新語は、“お皿を空にする”という意味になります。では、今なぜ「光盤行動」という新語が生まれたのでしょうか。

ご存知の方も多いと思いますが、中国で会食をするときは、食べ物を残すのがマナーとなっています。元々割り勘の習慣がなかった中国では、会食時、誰か一人がホストとなって飲食代を支払います。そのときに、テーブルの上の食器がすべて空になっていると、ホストに対して「物足りなかった」「もてなしの量が少なかった」と言っていることになり、ホストの面子を潰してしまうこととなります。逆に、会食の席で食べ物を残すということは「もうこれ以上食べきれない」「こんなに多くの料理でもてなしてくれてありがとう」という意味となり、ホストとしても食べ残しを見ては「皆が満足してくれたんだ」と感じることができるのです。

長年こうした食べ物を無駄にする習慣が続いてきたせいか、中国では食べ物を捨てることに抵抗感を抱かない人が多く、加えて、経済的に豊かになった現代中国人は面子のために、より多くの残飯を出すようになり、食糧廃棄物の問題は深刻な問題となっています。

2013年1月、この問題に一石を投じたのは、某新聞社社長でした。きれいに食べ終わったお皿を写真に収めては、中国版ツイッター「微博 (wei bo)」で公開し、「吃光盤里的東西 (意識：残さず食べよう)」と、つぶやき始めたのです。すると、これに賛同するユー



ザーが次々と現れ、リツイートされ、また同じように食べ終わったお皿の写真をアップして、食べ残し反対と訴える人が増えていったのです。その影響たるや新華社、人民日報といったマスコミまでも巻き込むほどとなり、「光盤行動」という言葉は徐々に広がっていきました。北京市内のレストランでは、ボランティア団体が作成した「食べ残しをやめよう」と書かれたビラが配られたり、食糧廃棄物の多さを訴えるテレビコマーシャルも流れるようになりました。

そして、旧正月を間近に控えた1月末、中国共産党の機関紙である人民日報は、今後大々的に国レベルで「節約に励み、浪費を慎もうキャンペーン」を展開していくことを発表しました。「浪費が恥ずべき思想であることを広めていかなければならない」という習近平総書記の言葉を掲載し、この「光盤行動」はさらに本格化しました。また、食べ残しだけに止まらず、同時に浪費を慎むことが叫ばれ始めました。

毎年、年末には日本でいう忘年会のような宴会(中国では、忘年会とは言いません)が、各企業で行われます。レストランの個室やホテルの会場を貸し切り、豪華な食事に、iPadなどのビンゴ賞品も用意され、社員は着飾り、盛大に行われるのです。しかし、2013年、この光景はぐんと減りました。食べ残しを減らすと同時に浪費を慎むことが叫ばれているため、自粛もしくは質素に執り行う企業が増えたのです。本来、年末こそが書入れ時だった高級レストランやフラワーショップ、ギフトショップは、多少なりともその影響を受けているようです。

人民日報によると、年間に2億人分の食糧



が廃棄物として処分されているそうです。国をあげて展開されるこの活動は、柔軟な思想を持つ若者を中心に浸透し始めており、レストランでの注文を少なめにしたり、食べ残したものを家に持ち帰ったりといった行動を積極的にとる人が増えました。

以前、知人の日本人と食事をしたとき、その知人はご飯粒一つ、いいえ、ゴマ粒一つ残さずきれいに食べきっていました。日本人の食べ物を大事にする精神の徹底振りに驚かされた瞬間で、とても印象深く残っています。それは決して意識的な行動ではなく「食べ物を粗末にしてはいけない」という教えが体いっばいに染みついて起こる自然な行動のようでした。近い将来、中国人もこの知人のようになるのでしょうか。「光盤行動」に期待してみましよう！

筆者紹介

呉 京順 (Jingshun Wu)

中国専利代理人。GIP China Corporation 総経理。北京師範大学卒業。メーカー、中国専利代理事務所で業務経験を積み、2007年よりグローバル・アイビー東京特許業務法人にて研修。2009年GIPグループの北京オフィスとなるGIP China Corporationを創設。主に、日本・韓国企業の中国特許・商標出願、権利化業務を担当。中日韓の三ヶ国語が堪能。中日韓文化に興味を持つ。